

インド語

一 ヒンドスタニー語学科の時代

1 草創期と発展期

草創期（一九〇八—一九二四）

東京外国語学校でインド語の教育が始まったのは、一九〇八（明治四十一）年に東洋語速成科でヒンドスタニー語とタミル語を取りあげられて以来のことである。インドの共通語ヒンドスタニー語、南インドおよびアジア・アフリカにおける英領植民地に在住するタミル語話者を念頭に置き、いずれかの言語に通じた人材の養成は、外交、通商からの要請であつたのである。一九〇二（明治三十五）年一月三十一日に調印された日英協約、同年七月七日に署名された日英軍事協定を含む両国陸海軍代表者会議に続き、一九〇五（明治三十八）年八月十二日に調印された日英同盟協約は、政治同盟が東亜とインドを対象とすることを示すものであり、その前文では「（ハ）東亜及印度ノ地域ニ於ケル両締盟国ノ領土権ヲ保持シ当該地域ニ於ケル両締盟国ノ特殊利益ヲ防護スルコト」（外務省編『日本外交文書 明治三十八年』一九六三年、五九—九三ページ）と記されているのである。

『東京外国語学校一覽 從明治四十一至四十二年』（一九〇八—一九〇九年）中の東洋語速成科規程によると、この科は修業年限一か年で午後四時半以降に授業がおこなわれる、実用を主とした夜間部であった。一九一一（明治四十四）年一月十九日の「文部省令第三号」により兩速成科はそれぞれヒンドスタニー語学科、タミル語学科に改められた。ここにヒンドスタニー語学科は修業年限三か年の本科として正式に発足したのである。速成科当時の教員は教師ヒンドスタニー語・ノニー・エル・ダット（インド人）と講師ヒンドスタニー語および馬來語・藤田季荘の二名である。ダットについては経歴不詳であり藤田についても馬來語兼任であったこと以外は不明である。一九〇九（明治四十二年）三月にヒンドスタニー語学科は二名の第一回修業生を出した。一〇年には二名、一一年には三名が続いている。タミル語学科は一九〇九（明治四十二年）に第一回修業生四名、一〇年に二名を出した。

一九〇九年にヒンドスタニー語学科は二人目のインド人教師ムハンマド・バラカトゥッラーを迎えた。庶務課資料によると氏の契約は三月七日より一九一一年七月三十一日までで月給一四〇円であった。以後、契約は更新されて一九一四（大正三）年に終わっている。バラカトゥッラーの着任によりヒンドスタニー語学科の教育は速成科、専修科を含め彼一人に委ねられた。反英独立運動の活動家として知られたバラカトゥッラーの教師像は明らかでない。なお一九一一年六月現在で学科の一年に六名、専修科の一年に二名の生徒が在籍していた。速成科は同年三月三十一日をもって廃止され、一九一三（大正二）年に新たな速成科規程が制定された。

バラカトゥッラーに続いて着任したインド人教師はデーヴァリー・ラール・スィングで、雇用期間は一九一四（大正三）年六月一日より一六年三月三十一日までの二年間であった。この教師についてはもはや何も語り伝えられていない。後任は庶務課資料によると一九一六（大正五）年六月十三日に月給一三〇円、持ち時間二〇時間で雇われたインド人教師ハリハルナート・トゥラル・アタルである。月給は一九二〇年には二六〇円三三銭に増額された。

彼は在職中の一九二二（大正十）年六月十四日に死去した。

『東京外国語学校一覽 大正八年』（一九一九年）にはヒンドスタニー語部に教授・漢文、馬來語およびヒンドスタニー語学科主幹・柴田猛猪、講師・ヒンドスタニー語主任・水口百亀二名の名が挙げられている。この年、各学科の名称は部に改められた。水口は一九一六（大正五）年三月ヒンドスタニー語学科第二回卒業生で、初任給月一二円、同二〇年に三〇円、持ち時間は初年度四時間、次年度七時間で、一九一九（大正八）年九月十日より二〇年七月三十一日まで在職した。ハリハルナートの助手的存在であったと思われる。二〇年九月十一日には乾彦一が手当月四〇円、持ち時間七時間でヒンドスタニー語講師として任命された。乾も水口と同じ第二回卒業生である。二一年に助教役に昇任し、主任になったが二二年五月十日に退官した。この間、二一年十月の第四回語学大会で「仏陀」が上演された。以後、語劇は一九三五（昭和十）年の第一六回大会まで数回にわたって上演された。水口、乾ともに具体的な授業内容が不明である。

ハリハルナートの後任インド人教師は一九二二（大正十一）年五月二十六日着任のヘンリー・ドラモンドである。月給は二五〇円で二四年三月三十一日の任期満了時には二七五円に昇給している。ドラモンド着任までの一九二二年五月六日より七月十日までを第五回卒業生の飯田四郎が週四時間担当の非常勤講師として埋めている。ドラモンドに続くインド人教師はビシャンバル・ダットである。氏は一九二四（大正十三）年五月二十一日に着任した。契約は六月二十四日から月給は二七五円、持ち時間は二四時間であった。ダット着任までの四月十日より七月十日までをインド人ケーショー・ラーム・サバルワルが非常勤講師を嘱託された。氏は一九三〇（昭和五）年四月十日より七月十日までと、三二年四月十日より七月十日までの二回再び講師を務めている。この間、ヒンドスタニー語部には一九二四（大正十三）年に教授・修身、文科主幹・馬來およびヒンドスタニー語部主幹・島本愛之助と、二五年に教授・法

律、馬來およびヒンドスタニー語部主幹・小林清貞が併任されていた。ダットは健康上の理由で辞職届を出し、二五年十月三十一日付で解雇された。バラカットウツラー以後ダットにいたるまで、草創期に來日したインド人教師はほとんどただ一人で学科を運営するという大変な重責を負わされていたのである。

発展期（一九二五—一九四三）

一九二五（大正十四）年十一月にヒンドスタニー語講師として蒲生禮一が採用された。一九二三（大正十二）年三月月貿易科卒業の蒲生に次いで、インド人教師ラーラー・アツタル・セーン・ジャインが一九二六年五月一日付で契約した。月給は二五〇円、宿舍料二五円、持ち時間二四時間であった。ジャインは一九二九（昭和四）年三月三十一日をもって退職し四月一日より大阪外国語学校に移った。本人がインタヴューで語ったところによると、当時の学科は三学年までありそれぞれ二〇名前後の生徒がいた。始業は午前八時十五分過ぎで午後二時から三時ごろに終了した。週三回の授業を受けもったが、ウルドゥー語の教科書類はまったくなく、デリーから自分で小学校用の教科書を取り寄せて使用した。授業はアリフ・ペー・ペーから始めたが言葉の学習のみであり文法の授業はまったくなく、生徒は普通の読み書きを習った。辞書はイギリス人の編集した部厚いものがあつた、という。氏はまた、軍人二名が通っていたとも述べているが、これは陸（海）軍委託選科の学生である。ヒンドスタニー語部での陸軍委託選科は一九二二（大正十一）年三月の一名を始めとして一九三四（昭和九）年三月まで大尉四、中尉三の計七名の修了（業）生を出している。

一九二七（昭和二）年三月二十八日の「文部省令第五号」により東京外国語学校規程が改正され修業年限が四年になった。蒲生は二八年に助教、三〇年にヒンドスタニー語部主任、三四年四月に教授に昇任した。一九三〇（昭和

五) 年十一月一日にインド人教師ムハンマド・バドル・ル・イスラーム・ファズリーが雇い外国人教師ヒンドスタニー語・ペルシャ語、として選任された。契約は一九三二(昭和七)年三月三十一日までで月給二五〇円、宿舍料二五円、持ち時間は二〇時間であった。ファズリーは一九三四(昭和九)年にウルドゥー語による『日本の真実』という著書をインドで出版しているが、同書によると、一九三〇年当時のヒンドスタニー語部は隔年募集のため一年一五名と三年一〇名の生徒がいた。一年生は八か月のうちかなりよく進歩しており、ウツタル・プラデーシュ州の三年級教科書をじゅうぶんすらすら読めるし幾らかの会話もできる。外国人教師には学校で日本語を使うことは許されていない。ウルドゥー語の意味はウルドゥー語で説明せねばならず、必要があれば英語を用いることはできた。図書館にはヒンドスタニー部門に約二千冊の蔵書があった、という。ファズリーはヒンドスタニー語の他にペルシャ語の教師として雇用されている。ファズリー以前のインド人教師はすべてヒンドスタニー語の教師として採用されたが、ファズリーにいたってペルシャ語が加えられたことは東京外国語大学におけるペルシャ語教育の基礎がこの時期より築かれ始めたことを示すものである。

ファズリーに次いでインド人教師になったのはムハンマド・ヌール・ル・ハサン・バルラースである。『東京外国語学校一覽 昭和七年』(一九三三年)では、ヒンドスタニー語部に教授・国語、ヒンドスタニー語部主幹・友枝照雄、助教授・主任・蒲生禮一と並んで、「備外国人教授ヒンドスタニー語・ペルシャ語モハマッド・ヌールウル・ハサン・バルラース(印度)」、の名が見いだされる。一八九〇年六月五日生まれのバルラースは一九三二(昭和七)年十月二十二日に着任後、一九四九(昭和二十四)年三月に退職するまでの一六年間を蒲生とともにヒンドスタニー語の教育に当たり語部の発展に尽力した。初任給二五〇円であった。庶務課の記録は、一九四八(昭和二十三)年四月一日より一九四九(昭和二十四)年三月三十一日まで契約、ヒンドスタニー語・ペルシャ語週一五時間、一九四八



蒲生禮一。インドの雑誌に原稿を送る際に撮ったもの（1963-64年頃）

（昭和二十三年）年六月一日・給二号俸一万〇、九二〇円、までで終わっているが、バルラーズの離日は戦後の混乱期の最中であつたとはいえ正確な日時や状況をも含め不明な点が多い。

一九三四（昭和九）年四月に蒲生は教授に昇任しヒンドスタニー語部主任・舎監になった。蒲生は一九三六（昭和十一年）年七月十八日付で文部省在外研究員としてインド・イラン地方在留を命ぜられた。

同年九月に出發し、ヨーロッパを経ての帰国は三八年四月三十日であつた。三六年八月三十一日より三八年五月三十一日までを第一二回拓殖科卒業生の木村一郎が非常勤講師として蒲生の穴を埋めた。バルラーズの授業は三八年卒業生の言によれば、定刻に始まり、会話の本を生徒に順番に読ませ、また別の例文を板書しては生徒と質疑応答をする、というもので、学期末テストは学習したことについての口頭試問であつた。バルラーズは在職中に日本に関する数多くの論文をデリー発行のウルドゥー文芸誌に発表したほか、日本の童謡・唱歌など二六〇編をウルドゥー語に翻訳し二冊本としてデリーのウルドゥー発展協会より出版するなど、日本紹介にも多大な貢献をした。

ヒンドスタニー語部は主任・蒲生と外国人教授バルラーズの努力によって発展し確固たるものとなった。一九三八（昭和十三年）年に帰国した蒲生は日本で最初の本格的なウルドゥー文法書『ヒンドスタニー語文法』を著した。教務課から発行されたガリ版刷りのこの文法書は約一七〇ページの分量で、第一編文字と発音、第二編文法、の構成で、

第二九課までの各課にそれぞれ練習問題と語彙が付され、教科書としての配慮が行き届いていた。じじつ本書は版を重ねながら外国語学校、専門学校、大学を通じ五〇年以上にわたって使用され続けた。この文法書によって学科は初めて基本的な教材に基づいた計画的な授業が可能になったといえることができるのである。蒲生はまたほぼ同じ時期に『ペルシア語文法』を著し本学におけるペルシャ語教育の基礎を築いている。学生にとつて必須なはずの辞書が出版されたのは遥かに遅く、一九四三（昭和十八）年のことで、それもインドのアラーハーバード発行のウルドゥー語・英語辞書の翻刻版であり、定価も一部八円とかなり高価であった。

一九一四（大正三）年三月、ヒンドスタニー語科は第一回卒業生四名を出した。以下、一六年に五名、一八年に五名、二〇年に八名、二二年に一二名、二三年に一名、二五年に七名、二六年に一二名の卒業生を世に送り時代は昭和に移った。初期の卒業生のうち、第一回卒業生の小川正は一九二二（大正十一）年五月より翌年七月まで大阪外国語学校印度語部の最初の日本人教師を務めた。第四回卒業生の沢英三もインド留学を経て一九二三（大正十二）年九月に大阪外国語学校に奉職し、一九六一（昭和三十六）年三月の定年退官までインド語教育を推進した。

2 東京外事専門学校期

推移と状況（一九四四―一九四八）

一九四四（昭和十九）年四月二十六日「文部省令第二九号」により東京外国語学校は東京外事専門学校と改称され、修業年限も三年に定められた。ヒンドスタニー語部はインド科になった。これよりさき、一九三七（昭和十二）年七月の日中戦争勃発以来、卒業生で応召されるものが目立つようになった。戦局の推移とともに、三八年度入学者に対

しては四一年十二月に繰り上げて第四三回卒業式がおこなわれた。インド科としては第一六回本科卒業生を出したことになる。翌四二年四月にインド科は速成科に一五名の入学者があった。第四四回卒業式は四三年九月二十五日におこなわれ、インド科は一四名の卒業生を出した。四四年九月には一名の卒業生があった。四五年三月の卒業生一〇名は四年制の最後の卒業生であり、四六年三月の卒業生六名は外国語学校を三年で終了し外事専門学校を卒業するという変則的事態となったのである。

外事専門学校入学の第一期生に対する蒲生とバルラースの授業は従来と異なることなく、文法、日常会話、短編小説の訳読など厳しいものであったが、情勢の急迫にともない学生の徴用や応召、一九四五（昭和二十）年四月の戦災による校舎の焼失などで授業は正常な体をなさなくなった。外事専門学校時代のインド科は南方進出への熱気と敗戦による虚脱と挫折感が錯綜した混乱期の渦中にあった。こうした状況を経て、一九四九（昭和二十四）年五月三十一日の「国立学校設置法」施行によって東京外国語大学が設置され、六月一日に学則が制定されるにおよび、ここにインド科は画期的な新時代を迎えることになったのである。

二 新制大学におけるインド学科の発展と拡大

1 インド学科の時代

移行から拡大へ（一九四九—一九六〇）

一九五一（昭和二十六）年三月三十一日に東京外事専門学校は廃止された。インド科最後の卒業生一名は二か年